

2022年度浜松市要介護度改善評価事業

利用者の希望に沿ったプログラムの実践したことで社会参加につながった事例報告

浜松市リハビリテーション病院

鈴木章紘

報告内容

1. 浜松市リハビリテーション病院の紹介

- 1-1 聖隷福祉事業団について
- 1-2 浜松市リハビリテーション病院について
- 1-3 浜松リハの通所リハについて

2. 事例報告

- 2-1 事例紹介
- 2-2 取り組み内容(目標の経過と共有)
- 2-3 評価 (計画書の方法のところ)
- 2-4 訓練内容
- 2-5 結果

3. 本事例のまとめ

- 3-1 考察
- 3-2 まとめと今後の取組



1. 浜松市リハビリテーション病院の紹介

浜松市リハビリテーション病院ウェブサイトから引用

1-2 浜松市リハビリテーション病院

病院理念

「私たちは、地域に根差し、利用者の尊厳と生活の質を尊重した、患者中心主義に基づく医療を提供します」

沿革

- 1943年 浜松陸軍病院として創設
- 1945年 国立浜松病院として発足
- 1999年 浜松市に委譲。浜松市リハビリテーション病院として病院開設
- 2008年 聖隷福祉事業団が指定管理者として運営開始
- 2014年 新病院建築



-介護保険事業-
短時間通所
リハビリテーション

『もつとよくなりたい
にいたい。』



1-3 浜松市リハビリテーション病院の通所リハ

短い利用時間で、利用者の目標や課題に合わせた個別リハビリやトレーニングマシンの利用、自主練習を中心に行う。

- ・1～2時間程度の時間でサービスを提供する介護保険のリハビリテーション。
- ・一般的なデイケア、デイサービスとは違い、入浴や食事はなく、リハビリテーションだけを行う。

- ・ 個別リハ+αでリハビリを行いたい
- ・ できることを増やしたい/うまくできるようになりたい
- ・ 継続したフォロー、指導が必要
- ・ 退院後の在宅生活に不安がある



1クール=90分

40

分/回

+α

週2

回以上

POS

個別指導

POINT

- ・利用時間は90分/回
- ・退院日または要介護・要支援の認定日から3ヶ月間は個別リハ40分/回を週2回以上
- ・3ヶ月以上経過した場合は、20分の個別リハビリ
- ・個別リハビリ以外の時間はマシンや自主トレを療法士の指導のもとでできる
- ・POSを課題に合わせて調整可能

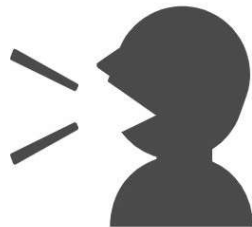
1-3 浜松市リハビリテーション病院の通所リハ

当院の特徴

自己選択の自由度が高い



医師との連携



言語聴覚士



運転



復職支援



完全個別指導



訪問リハ併設



エリア無制限



先進機器



2. 事例報告

浜松まつり公式ウェブサイトから引用

背景：生活期におけるリハビリテーション

生活期リハビリテーション

在宅・施設を問わず、機能や活動の低下を防ぎ、身体的、精神的かつ社会的に最も適した生活を獲得するために提供されるリハビリテーション医療サービスの一部である

松坂誠徳 2017

社会参加や**生活動作**のなかでの多様な運動、活動量増加が必要。

生活機能を維持、向上するための**目標**であると同時に**手段**でもある。

背景：目標としての社会参加

社会参加や生活動作は生活機能を維持、向上するための目標であり手段である



先行研究

社会参加において趣味活動やスポーツの関連性が高い。

ただし、生活の質には社会参加だけではなく、主観的な満足度が関わる。

Melanie 2004、kanamori 2014



そのため、スタッフは

利用者にとって価値があり、且つ生活機能に寄与する活動を

利用者と共有し、利用者の自己意思により選択していかなければいけない。

背景：目標の共有

Shared Decision Making (SDM)

対象者の希望を考慮した合意形成方法。

治療の選択肢、効果と害、患者の価値観、希望、状況を踏まえ、患者と医療者が
共に意思決定に参加する過程を示す。

対象者が意思決定に参加し、両者が情報を共有しながら合意形成を段階的に進めていく
方法である。



対象者との目標共有と自己意思決定の支援

Charles 1997

背景

- 今回、利用者で「息子の卒業記念の凧あげ大会で凧を上げたい」という具体的な目標を意思決定された方がいた。
- その意思決定を共有し、身体機能訓練から実際の活動まで支援し、社会参加と活動の向上を促した。
- 今回の症例報告は、通所リハビリテーションにおける目標共有と目標に沿った支援を通じた成果報告であり、要介護度改善につなげていくに取り組みとして考えている。
- 利用中の経過を見直すことで、生活期の症例における目標共有後の社会参加に対するリハビリテーションの有効性について検討する。

2-1 事例紹介

1.対象者情報

性別：男性

年齢：50歳代

介護度：要支援2

通所頻度：週2回利用

発症前の職業：建築板金業 発症前の趣味：浜松祭り、凧揚げ

2.現病歴

- 約2年前に視床出血を発症。
- 左片麻痺、運動麻痺残存、感覚障害が重度。
- 約3ヶ月間回復期でリハを実施し、退院。

2-2 取り組み内容について：目標の経過

1.利用開始時の目標

- 退院後、運転再開と復職を目標に通所リハを開始。
- 現在は運転は再開可能、復職は事務作業を再開。

2.利用開始時の目標達成後の目標

- 不整地歩行や歩行速度の向上、左上肢の作業への参加の向上を目標とし、身体機能の改善を希望され利用を継続。

2-2 取り組み内容について：目標の共有

現場復帰という目標に対し、機能訓練へ意識が向いてしまう傾向にあった。
そこで、面接の場を設け、目標を再検討した。

3. 面談内容

- 担当者：長期的目標として復職は必要であるが、そこに至る前に活動としての目標をたてたいと提案をした。
- 利用者：発症前、凧揚げが趣味であり精力的に浜松祭りに参加していた。
息子が小学校を卒業する際に凧揚げ大会がある。それに参加をしたい。
- ▶ 理由：息子は初凧を揚げた利用者の姿を覚えている。
利用者が凧揚げをしている姿を息子はカッコいいと話していた。
発症前の父親らしさをみせたい。

2-2 取り組み内容について：目標の共有

「息子の卒業記念の凧揚げ大会で凧を上げたい」という目標を意思決定された

4. 支援の計画

- 利用者の意思決定をスタッフとCM、医師と共有した。
- 凧揚げの当日までは約10ヶ月の期間があった。
- 半年間、通所リハビリテーションにて通常の利用に加えて凧あげ動作の練習を実施。
- その後、実際の凧を使用して凧揚げ動作の練習を実施。

5. 活動目標

- 短期(6ヶ月程度)：評価項目の向上を通して不整地で安全に移動できる。
- 長期(6ヶ月以降)：実際の凧揚げを段階的に実施し、実際に凧揚げができる。

2-3 評価

評価項目

1	握力	把持力の評価、全身の筋力評価
2	歩行速度	歩行機能の評価
3	2STEP TEST	動的バランス
4	Functional Reach	静的バランス
5	6分間歩行	体力
6	本人の語り(narrative)	満足度、遂行度、練習を通しての語り、反応

※1,2は毎月評価、3,4,5は半年後に評価、6は実際の動作後に評価を実施

2-4 訓練内容

1.基礎訓練

1	上肢訓練	肩、肘の運動、手指の操作練習
2	歩行練習	芝生、大股など応用歩行
3	筋力トレーニング	下肢の筋力強化
4	マシントレーニング	体力の向上
5	動作の基礎練習	尻糸牽引の基礎練習(図1)
6	自主トレーニング指導	自宅での運動、ストレッチ指導



図1 動作の基礎練習

2-4 訓練内容

2.段階的な凧揚げの練習

難易度 易

1	軽い凧(図1)	動作確認
2	大きめの凧(図2)	重量を加えての動作確認
3	和凧(図3)	揚げる瞬間の牽引の練習
4	和凧(図3)	牽引とステップ練習
5	和凧(図3)	実際の動作

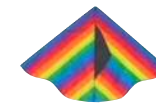


図1 軽い凧 幅60cm



図2 大きめ凧 幅120cm

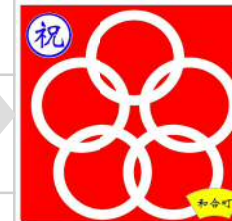
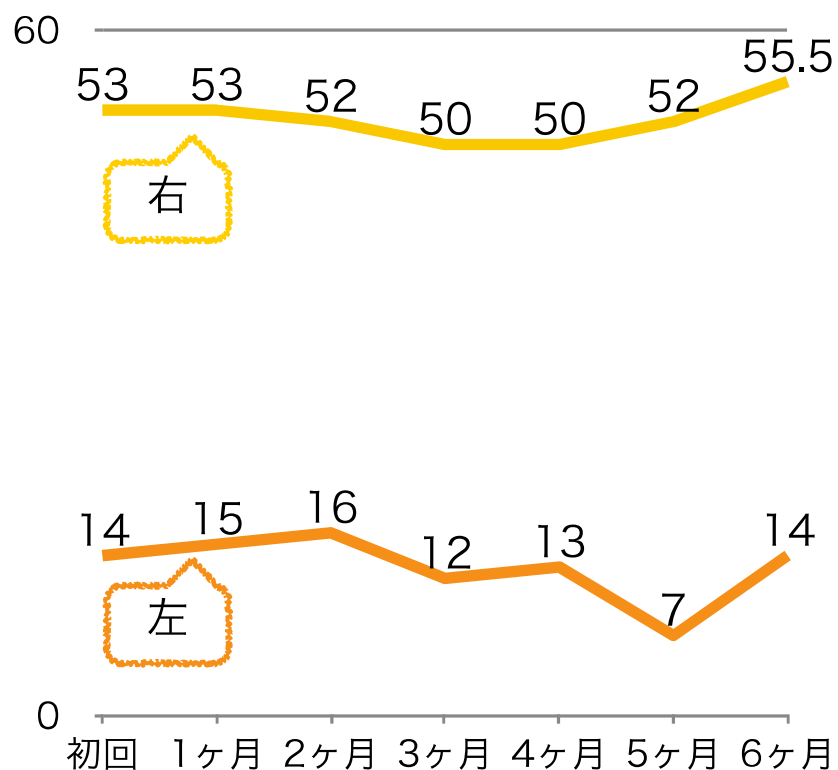


図3 和凧 半畳

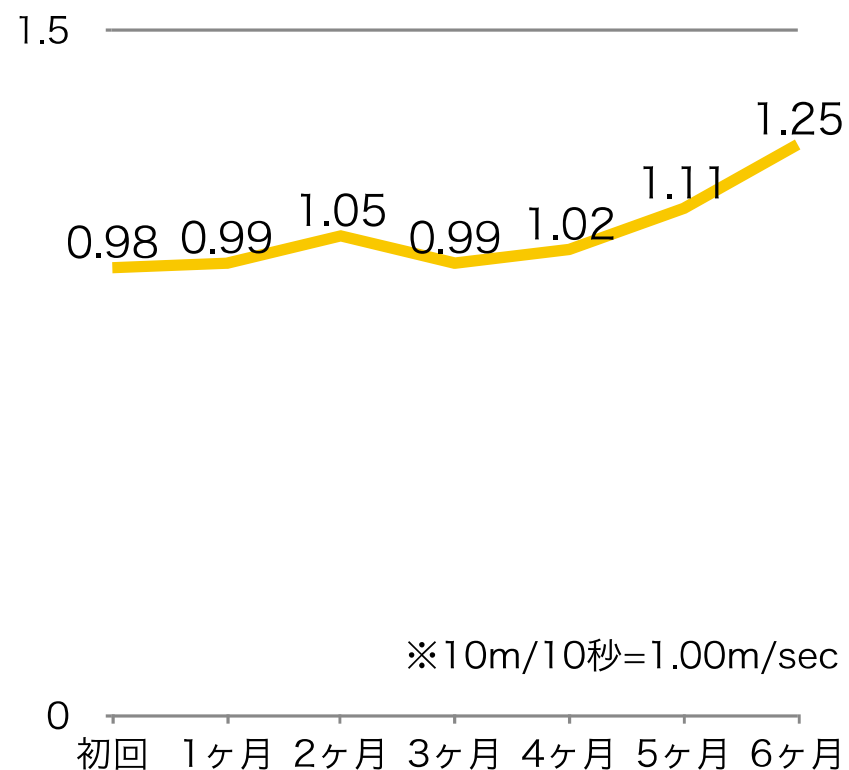
難易度 難

2-5 結果 評価項目の変化

1. 握力



2. 歩行速度 m/sec



2-5 結果 評価項目の変化

		初回	半年後
3	2STEP TEST (cm)	155	177
	2STEP値	0.96(口コモ度2)	1.11(口コモ度1)
4	Functional Reach Rt (cm)	25	35
	Lt (cm)	25	30
5	6分間歩行 (m)	305	355

2-5 結果 風揚げ動作についての語り

6	本人の語り(narrative)	満足度・遂行度(10段階評価)、練習を通しての語り、反応
---	------------------	------------------------------

■ 満足度：10 遂行度：7

■ 本人の語り、反応：

目標を決めて活動するのはとてもよかった。

積極的に運動をしようと思うし、やる気が湧いてくる。

特に好きなことは良い。

また、実際の動作を行えたことは非常に嬉しい。

今後の活力にもなる。



2-5 結果 凧揚げ動作についての語り

6	本人の語り(narrative)	満足度・遂行度(10段階評価)、練習を通しての語り、反応
---	------------------	------------------------------

■ 生活変化

- ・ 食事の時、茶碗がもてるようになった。
- ・ 不整地を歩くときに前より安心して歩ける。
- ・ 歩行時に上肢が振れるようになった。
- ・ 歩行時間、距離がのびた。





地域に根ざしたリハビリテーション医療を目指して



3. 本事例のまとめ

浜松市リハビリテーション病院ウェブサイトから引用

3-1 考察

- 今回機能訓練へ意識が向いてしまう利用者に対し、面接の場を設け、目標を再検討した。
- 目標は利用者が主体的に取り組むことができるように意思決定を支援した。

義務と感じる社会参加では、精神的健康感は低下するという負の側面があり、対象者の主体的な意思決定に基づく社会参加でなければ、その意義は失われる。

Tomioka 2017

社会参加の押しつけにならないために、スタッフが考える社会参加を促すのではなく、

医療者の持つ情報と**利用者の持つ情報**を照らし合わせ、

互いの考える「活動参加」について**共通認識**を持つ必要がある。

3-2 まとめと今後の取り組み

まとめ

社会参加と主観的満足度を促進し、生活の質を向上していくためには、その人らしさとはなにかというnarrativeな要素を利用者とスタッフが共有していることと、利用者自身が自己意思に基づく選択によって行動を決定していくことが重要である。

今後の取り組み

- 結果の通り、今回の取り組みによりご本人の身体機能、活動の向上が認められた。
- 利用者の希望に沿った支援を通じて、取り組み意欲を向上できた結果と考える。
- 目標設定の支援は社会参加において重要である。
- 今後は他施設においても本事例の様な取り組みができる様に、面談方法や意思決定支援を施設間で共有していきたい。

3-2 まとめと今後の取り組み

リハビリテーションマネジメント加算

解決すべき課題の把握を適切に行い、改善に係る目標を設定し、計画を作成した上で、必要な時期に必要な期間を定めてリハビリテーションの提供を行う。

生活行為向上リハビリテーション実施加算

活動機能の向上ができるように目標を立て、計画に沿ったリハビリテーションを行う。

厚生労働省が掲げる活動参加、目標設定の支援体制を活用

厚生労働省：令和3年介護報酬改定説明会資料